中学校総合的学習の時間における探究活動の視座
── 福祉課題に対するレジリエンスの意義 ──

The perspective of the research activities in periods of integrated studies at junior high school: the significance of resilience on modern issues in social welfare

谷田（松﨑）勇人※
TANIDA（MATSUZAKI）Hayato

Abstract:

This paper focuses on the perspective of the research activities in periods of integrated studies at junior high school, especially on the significance of resilience perspective toward modern issues in social work. This article is divided into the following four parts.

■ Introduction
■ The perspective of resilience and key concepts
■ The significance of resilience perspective on modern issues in social work during periods of integrating studies at secondary school
■ The next issue

キーワード：
総合的学習の時間、探究活動、視座、福祉課題、レジリエンス

Ⅰ．はじめに

1．中学校総合的学習の時間における目標と探究課題

「総合的学習の時間」が中学校の教育課程に初めて導入された 1998 年の学習指導要領においては、その目標として、自ら課題を見つけ、学び、考え、判断し、問題解決する資質や能力を育成することが挙げられた。2017 年 7 月告示の中学校学習指導要領の「総合的な学習の時間」においては、その目標として、探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し，自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成することを目指すとされた。つまり、中学校の総合的学習の時間の目標は、現代的課題を解決するための資質や能力の育成である。

総合的な学習の時間では、各学校が目標を実現するにふさわしい探究課題を設定することとされ、例えば、国際理解、環境、福祉・健康などの現代的な諸課題に対応する課題が挙げられている[1)]。社会的責任感の理論家であり実践家である米国の Berman は、生徒が現代的課題の解決に対し悲観的になりやすいことを指摘している[2)]。

*佐野日本大学短期大学　総合キャリア教育学科　Sano Nihon University College Professor

2．探究活動の視座と問題提起

現代的課題に対応する課題を取り上げる際には、これらの現代的課題の解決が容易ではないため、それをどのような視座から取り上げるかが問題となる。探究活動の視座とは、Gadamerの概念を借りれば、「先入見」であり、科学論からすれば探究の前提となっているパラダイムを意味する。つまり、どのような先入見、パラダイムでもって現代的課題に接近するかが重要なのである。

2008年の「中学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編」では、探究的な学習の姿は、生徒が「①日常生活や社会に目を向けた時に湧き上がってくる疑問や関心に基づいて、自ら課題を見付け、②そこにある具体的な問題について情報を収集し、③その情報を整理・分析したり、知識や技能に結び付けたり、考えを出し合ったりしながら問題の解決に取り組み、④明らかになった考えや意見などをまとめ・表現し、そこからまた新たな課題を見付け、更なる問題の解決を始めるといった学習活動を発展的に繰り返していく。[3)]」とされたが、そのような探究活動の視座がどのようなものであるべきかを、本稿では問題として取り上げ、現代的課題つまり教材として、福祉課題を例として考察を進める。

2018年の同解説では、中学校総合的学習の時間の探究的な見方・考え方として、一つには各教科等における見方・考え方を総合的に働かせることと、二つには総合的学習に固有な見方・考え方を働かせることであるとし、それらの意味は、特定の教科等の視点だけで捉えきれない広範な事象を、多様な角度から俯瞰して捉えることであり、また、課題の探究を通して自己の生き方を問い続けるという、総合的な学習の時間に特有の物事を捉える視点や考え方であるとされている[4)]。この考察では探究活動の視座が究明されているとは言えない。

先行研究を吟味した結果、2021年12月の時点で、総合的な学習の時間の探究活動の視座として、レジリエンスを取り上げたものは見当たらなかったため、本稿は先駆的なものである。

本稿では、レジリエンスという視点(見方・考え方）を「Ⅱ．レジリエンスという視座と主要概念」において、理論的に整理し、その視点の福祉課題への応用可能性を検討する。次にこの視点の総合的学習の時間における探究活動に対する意味を「Ⅲ．レジリエンスの総合的学習の時間における意義」で検討する。

本研究は令和3年度佐野日本大学短期大学研究倫理審査委員会の承認を得て進められた（承認番号21034号)。

Ⅱ．レジリエンスという視座と主要概念

1．レジリエンス研究の歴史と主要概念

レジリエンス研究は、ポジティブ心理学の系譜に位置し、精神的病理を患う親を持つ子どもが健全に成長する要因を突き止める研究から始まり、後に、内的要因と環境的要因が作用するメカニズムの研究へと向かい、その枠組みが他の分野に応用されてきた。レジリエンスとは、元々跳ね返す力を意味し、発達心理学において1990年代以降注目されてきた概念である。この視座は前提として、Bronfenbrenner（1979）のマルチ・システムにおいて発達は生じるという理論的立場を取ってきた。レジリエンス研究においては、予防的観点から発達に影響を与えるリスクに注目して研究するうちに、発達上のリスクに曝されながらも、健全に適応し発達する子どもたちに気付き、それらの子どもたちを形容して「レジリエントな」子どもたちを呼ぶようになった。

Fraserらによれば、リスク要因とは「不全（不全の発現）の可能性を助長するあらゆる影響、より深刻な状態へと悪化させた

り、問題状況を持続させたりすることに寄与する影響」と定義され[5]、つまり、リスク要因とは適応的でない結果、例えば非行や犯罪等となって現れる結果を高める可能性がある影響力を意味する。Fraser らによれば、防御推進要因とは「ストレングス」とされ、「良好な発達結果をもたらし、子どもが逆境に打ち勝つことを促す、内的および外的な資源」と定義され[6]、つまり、防御推進要因とは、健全な適応を助けるような影響を与える内的なまたは外的な強さや影響力を意味する。レジリエンスは、リスクの高い子どもの環境において、通常は存在するストレングスから生起するとされ、レジリエンスはリスクと防御推進要因との相互作用や、加算された両要因毎の影響により生じるという理論的立場を取っている[7]。Fraser らは、レジリエンスの以下のような三つの下位類型、1．困難を克服すること、2．ストレスのもとで維持される能力、3．トラウマからの回復を挙げたうえで、これらを包括できる枠組みとして、レジリエンスとは「逆境にもかかわらず、うまく適応すること」と定義している[8]。リスク要因と防御推進要因をシステムの各レベルにおいて整理したものが表1である（門永の邦訳から引用した）[9]。ただし、Fraser らは、Bronfenbrenne（1979）の主張する環境の入れ子構造は採用していない。

2．レジリエンス概念の応用

以上のようなレジリエンス概念が、今では多様な分野に応用されている。それは、災害対策、新型コロナ対策、環境保護や持続可能な地域社会の実現、臨床心理学や教育臨床、児童・青年福祉政策等である。

例えば福祉領域への応用として以下のようなことが指摘された。レジリエンスという概念は、ソーシャルワーク実践に対し、新しい接近法や哲学を与える。「（ソーシャルワーク実践の哲学に）レジリエンスの視点は以下のような影響を与える。レジリエンスを高める視点はクライエントをサバイバーとして、リスクや人生の困難な状況を乗り越えられる人として、考える手段である。その視点は、ソーシャルワーク実践のための一つの接近法であり、クライエントの自然な自己回復傾向を信じて促進するような接近法である。その視点は、リバウンドの、可能性の、質的転換のアイデアに基づくソーシャルワーク実践である。[10]」レジリエンスは個人や環境の回復力や防御推進要因を強調する視点であり、かつ、リスクを軽減することへ向けた方法である。

近年では、地域社会の多様な問題に接近し予防し解決を目指す視座として、コミュニティ・レジリエンスという概念が注目されている。発達的視点と環境生態学的視点が統一的に検討され、理論化された。例えば、

表1　児童期の深刻な社会問題に共通するリスクと防御推進要因：生態学的マルチシステムの視座

システムレベル	リスク要因	防御推進要因
近隣や学校を含む広範な環境の諸条件	○教育や就労の機会が非常に少ないこと ○人種差別，不公正 ○貧困	○教育，就労，成長，ものごとを達成する機会が多いこと ○集団による効力 ○思いやりのある大人がいること
家族の諸条件	○子どもへの不適切なかかわり ○両親間の葛藤状態 ○親の精神障害 ○厳しい養育態度	○良好な親子関係 ○効果的な育児
個人の心理社会的，生物学的な特性	○性別 ○遺伝的な傾向を含む生物医学的な問題	○「扱いやすい」気質の乳幼児であること ○自尊心，頑健性 ○規範的な役割における対処能力，自己効力感 ○知能が高いこと

Berkes と Ross（2013）によれば、コミュニティのレジリエンスとは、以下の二つを意味するとされた。1．強み、2．強みを引き込み結び付ける働きである。ここでの強み（ストレングス）は、地域のインフラストラクチャー、肯定的見通し、関与する統治、社会的ネットワーク、価値や信念、知識やスキルや学習、リーダーシップ、住民と地域の関係性、多様で革新的な経済を含んでいる。また、強みを引き込み結び付ける働きは、媒介者（エージェンシー）：個人や集団の自由な選択と独立的行為や、自己組織化（セルフ・オーガナイジング）：システムが自らを構造化し新しい構造を創り出すことを含んでいる[11]。

レジリエンスの視点を家族や地域社会に応用するならば、レジリエンスを高める視点は、家族や地域社会を困難な状況を乗り越えられる主体として捉えるソーシャルワーク実践の接近法を示唆する。また、この視点は、家族や地域社会の自然な自己回復傾向を信じて促進するような接近法を、家族や地域社会がリスク要因や逆境や困難を跳ね返し、可能性を持ち、質的転換できるというアイデアに基づく、ソーシャルワーク実践を示唆する。

レジリエンスを高める視点は、多面的な側面から成る複合的システムにおけるリスクと防御推進要因を意味すると同時に、個人・家族・地域社会等の主体性に注目する性格を持つ。また、その視点はそれらの水準で、自己組織化（対等な立場で影響し合いまとまっていくこと）を意味し、個人・家族・地域社会等が影響し合いながら、逆境を乗り越え適応していく過程と、メカニズムを探究すべきことを示唆する。福祉課題解決を目指すソーシャルワーク実践はそのポジティブな過程を信じ、促進する過程である。

レジリエンスの過程は困難な状況に適応する過程であり、それを分析すると、リスクと防御推進要因の相互作用や、両要因毎に加算された影響力により、レジリエンスが現れてくると理解できる。人々はレジリエンスを持つのではなく、以下のような六つの状況において、レジリエンスを現すのである。

1．困難な挑戦を受ける経験、
2．発達的移行期、
3．個人的逆境、
4．集合的逆境、
5．組織的な変化、
6．広範囲にわたる社会政治的な変化

という諸状況である[12]。

このように、レジリエンスは、個人・家族・地域社会・より大きな社会に対し、福祉の面での困難な問題状況、つまり、福祉課題を乗り越えるための前向きでポジティブな視座として機能するのである。

Ⅲ．レジリエンスの総合的学習の時間における意義

中学校の総合的学習においては現代的課題に対応する課題を取り上げることになっているが、その際の探究活動の有効な視点として機能するものが、レジリエンスという視点である。この視点は、生活や人生の闇の側面（リスク）と光の側面（防御推進要因）を同時に理解して、困難に出会っても適応していこうとするシステムの傾向を信じ、その傾向を検証しようとしている。

最後に、この視点がなぜ総合的学習の時間において有効なのかを述べる。第1の理由は、レジリエンス概念は、災害等の極めてストレスの高いリスクから、より日常的なリスクまでをカバーし、個人や家族や地域がそれらに曝されながらも、それら主体の内部と外部にある防御推進要因としての強さを活用しながら、創造的に適応し、成長し質的に異なる高いレベルの恒常性へ向

けて、システムが変容するというポジティブな見通しをもたらすためである。

第2の理由は、レジリエンス概念がマルチ・システムの観点から、多面的に統合的に問題の予防と解決へ向けた視点と方法を提供するからである。つまり、この視点こそが、多様な要因を統合的に捉えることを通して、教科等の知識や技術を統合する総合的な探究活動を可能とするためである。

Ⅳ．今後の課題

レジリエンス概念を理論的に中学校の総合的学習の時間の探究活動に応用することを検討してきたが、レジリエンスという視点を総合的学習の時間に適用し、その学習成果、特に前向きに取り組む姿勢や能力の変容を実証的に検討することが次なる課題である。

【註】

1）文部科学省（2018)、中学校学習指導要領（平成29年告示）解説　総合的学習の時間編、p.11

2）Berman, S.（1997）Children's social consciousness and the development of social responsibility.pp.120-121.

3）前掲書、p.9

4）前掲書、p.10

5）マーク・W・フレイザー編著、門永朋子・岩間伸之・山縣文治訳（2009）．子どものリスクとレジリエンス―子どもの力を活かす援助―、p.5

6）同上書、p.7

7）同上書、p.7、pp.48-51

8）同上書、pp.32-33

9）同上書、p.55

10）Greene, R. R.（2008）. Resilience, in The National Association of Social Workers, The Encyclopedia of Social Work; 20th edition, Volume 3: 529.

11）Berkes, F., and Ross, H.,（2013）. Community resilience: Toward an integrated approach, Society and Natural Resources, 26: 13-14.

12）Greene, R. R.（2008）. Resilience,527-528.

【参考文献】

Berkes, F., and Ross, H.,（2013）. Community resilience: Toward an integrated approach, Society and Natural Resources, 26:1, 5-20.

Berman, S.（1997）. Children's social consciousness and the development of social responsibility. Albany NY: State University of New York Press

Bronfenbrenner, U.（1979）. The ecology of human development. Cambridge, MA: Harvard University Press.

Fraser, M. W., ed.,（2004）. Risk and resilience in childhood: an ecological perspective – 2nd ed.

マーク・W・フレイザー編著、門永朋子・岩間伸之・山縣文治訳（2009）．子どものリスクとレジリエンス―子どもの力を活かす援助―、京都、ミネルヴァ書房

Gadamer, H. G.（1990）. Gesammelte Werke, Band 1, Hermeneutik Ⅰ : Wahrheit und Methode. Grundzuge einer philosophischen Hermeneutik, 6.Aufl., J.C.B.Mohr, Tubingen, S.270-S.384.

Greene, R. R.（2008）. Resilience, in The National Association of Social Workers, The Encyclopedia of Social Work; 20th edition, Volume 3（pp. 526-531）. Washington, DC: NASW Press and New York: Oxford University Press.